

再生担う学生・外国人

列島

発

四
地

高度経済成長期にサラリーマンらの住まいとして続々と建てられた団地。だが、成長した子ども世代は去り、残った親世代は高齢化や独居化が進む一方だ。そんな団地の活性化に、近くのキャンバスに通う学生や地域で働く外国人が、役買うケースが出てきている。東京都と愛知県の団地を訪ねた。

大学と地域連携し活動

真打機場、高島町の東側。地鉄都心線・三田線高島駅の二つの駅の間にさう14階建ての64棟が集まる。入居開始から38年。かつて3万人を超過した人口は2万人を切り、その後も少しずつ減り、現在は1万5千人程度だ。この3割弱が65歳以上だ。

東文化大学の学生
「新住民」は18歳
その一人、長野千穂
篠田悠次さん20
モンゴル出身の留
リガラトさん23
DKをシェアして
大学がURから
上げた部屋をあつ
すぐ近くにキャン
する大工場もでき
る

「バスがある大
きな、いすわも
たちだ。
室の計16人。
身で、3年生の
は、中国・内
学生ホウ・ジ
と3月から2
いる。
一括して借り
せんされた。

家賃は光熱費も場より安い動に積極参加する。カフ「サンク」大が地域と「高島平再開発」一環だ。
など、田地のお祭りの

なつて地域活性化の相手を任せ、日々の業務を務めるセブン。8年で無事に春にト」の組合によるセブンの手元へと運搬局も運城通貨の管理がなくなりました。

ては、自動車保有率は、一人のエル・ルー(40)が昨春
めている。系人の妻と3人

品工場で種ナニ・セーザーから自治会長人の息子がい田地に住んで、前会長の下、下水管掃除され学び、このした。また緑町住

り手不足の会では、つけ手がいな
「なぜ外国」
という声が、
のが「地域の
考えていた
た。
「日本人へ
にある『壁』
たい」とセ

つた地域活動が多くある。「年寄りだけの自治会を助けてほしい。林貢さんは篠田さんならに期待する。大学に図っても、キャンパスのそばに安く快適な住家があるが、それが生き残るための主な組合だ。仕大な実験です」と語る。

自治会役員も務める

「高島平再生プロジェクト」のイメージ

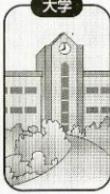
地域



団地の部屋を借り上げ

大学に近い住環境を提供

烏平國故



団地の部屋を安く提供
(1DK 5万円、
2DK 8万円)
家賃の一部を
「サンク」で支払い

地域通貨「サンク」でお礼

学生

The Asahi Shimbun

宅には、もともと工場関係者らで11年間にわたって多くが住んでいた。ただ、日本が入国管理制度化され、それが大きな変化となった。日本人の人口は既に90年代、その頃からすでに大きくなっていた。日本人の顔が徐々に減り、代わりに外国人やペルーカー人が増えた。いま3棟で暮らす78世帯のうち、9割近くが労働者として多くの地域の生活者である。もちろんことを考へると、事なんですよ」と話す。

日本の団地 都市部への人口集中で生じた深刻な住宅不足を解消するため、1950年代後半から建てられてきた。旧建設省の外郭団体・日本住宅公団（現・UR）が50年に設立され以降、本格的に普及し、60年代後半～70年代前半に建設一ヶ令を迎えた。ダイニンクキッチンなどを備えた洋風の造りは当時、サラリーマンらのあこがれで、「田舎の言葉も生まれました」。URが管理する賃貸団地は180万戸、団地の約7万台（2003年3月）。市町村や都道府県が管理する公営団地も200万戸以上ある。